

集中講義『教師学』における受講前後の 受講者の教育観の変容と説明時間の関連

(コミュニケーション・スタイルの研究 その5)¹⁾

大河原 清*・牛嶋 佳**

(1999年1月7日受理)

Kiyoshi OOKAWARA・Kei USHIJIMA

The Correlation Between Changes of Learners' Educational Viewpoints and Lecturing
Time on "T.E.T.; Teachers' Effectiveness Training", in an Intensive Course.

要 約

本研究の目的は、集中講義で用いられたテキスト教材『教師学』に関わり、①受講前後に受講者の教育観（神話的役割観）についての意識が変化するかどうかを、アンケート調査で調べることと、②講義内容のVTR録画から、説明時間とアンケート項目の有意性との関連を分析することにある。

調査結果から、短期間の集中講義がアンケート全31項目のうち21項目において、有意差のある変化を確認することができた。次に、説明時間とアンケート項目の有意性との関連では、大分類において説明時間に対応する形で有意性の関連を確認できたが、小分類においては必ずしも明確な関連を確認することが出来なかった。

キーワード：教育観、神話的役割観、教師のコミュニケーション、教師学、わたしメッセージ、集中講義の成果測定、四角になったコミュニケーション、説明時間

1. は じ め に

これまでの研究から、教師の言葉として外部に表現されるメッセージは、その表現方法に応じて、学習者のやる気を引き出すメッセージになることが分かっている。たとえば、『教師学』（近藤 1993）でいう「あなたメッセージ」よりも「わたしメッセージ」はやる気

* 岩手大学教育学部

** 岩手大学教育学部小学校教員養成課程教育実践研究指導センター4年次

を引き起こす表現である。また、「あなたメッセージ」から「わたしメッセージ」に表現方法を変更しようとする際、いわゆる教育観として、「わたしメッセージ」を発する考え方の変更を行うことの必要性についても、一つの示唆が得られている。

このような観点から、集中講義において取り上げられる内容が、受講者の教育観についての意識までも変更する上で作用するであろうが、興味のある研究対象となった。集中講義では、テキスト教材として『教師学』が用いられた。講師は『教師学』の著者、近藤千恵氏である。

2. 研究目的

4段階の評定尺度法によるアンケート調査から、集中講義で説明されるであろうと調査者側で事前に予想した項目について、どの程度の変化を検出できるかを明らかにする。特に、テキスト教材『教師学』を用いての短期的な講義が、教育観（以下では、「神話的役割観」に絞る）の変更に有意に作用するかを明らかにする。

次に、講師による説明時間とアンケート項目の有意性との関連について分析する。

3. 被調査者および調査期間

集中講義は、岩手大学教育学部において、講義名『教授行動論特殊講義』（2単位）の下で、1998年8月4日から7日にかけて行われた。集中講義への4日間の受講参加者の延べ人数は172名であった。今回報告する分析対象とした被調査者は、『教師学』受講経験が初めての学生を主とする23名（学生20名、現職教員2名、一般参加者1名；以下、「初受講生」と呼ぶ）である。調査は、8月4日の講義開始直前と、8月6日夕刻の講義終了後に行われた。受講最終日の8月7日に調査をしなかったのは、最終日が試験日となり、受講者の中には必ずしも単位取得を目的とせず、欠席する者のいることが分かったからである。

集中講義への参加者には学生以外の一般参加者も含まれ、既に教師学の受講経験のある者が19名いた。彼らの中には教師学のインストラクターの資格取得者も5名前後含まれていた。残り14名は、学部で筆者が開講している講義『教授行動論』において教師学の内容を一通り学習している者たちであった。

したがって、直接の分析対象とした被調査者は、教師学を初めて受講する学生を中心とする、初受講生23名である。

4. 調査項目と方法

調査はアンケート用紙を用いた。アンケート項目は、教師学を学習すれば身につくであろうと予想した31項目、その他フェイスシート用として6項目を含む、全部で37項目であ

る（結果を表記した表1「『教師学』受講生に対するアンケート用紙」を参照）。

講師である近藤氏には、講義開始に先立って、アンケート調査を実施することの許可を得たが、調査項目については何も知らせなかった。講義が、講師側の意図で有意に影響を受けることを避けるためであった。

5. 講義内容の概略

集中講義で取り上げられた内容は、次の通りである。

教師学の内容（最終日のテスト項目から）

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 教師学マインド | 5. 勝負なし法 |
| 2. 行動の四角形 | 6. 価値観の対立を解く方法 |
| 3. 能動的な聞き方 | 7. 問題なし領域 |
| 4. 対決のわたしメッセージ | |

講義は講師による内容の説明をはじめ、体験的な実習、特に話し合いを中心に進められており、単なる知識の説明ではない構成になっていた。

6. 結果および考察

6. 1 アンケート項目の受講前後の有意性の検定結果

結果は、表1：『教師学』受講生に対するアンケート用紙の右側に示す通りである。実験群の初受講生23名が、それである。アンケート項目番号2から31について、受講前と受講後の評定尺度得点の平均値を、対応のある項目についてのウィルコクソン符号順位検定結果と共に示してある。また、統制群として、盛岡近辺の教職単位の取得を目指す文学部学生1・3年生99名（1年生60名・3年生39名）の同じく、その平均値を示してある。

アンケート項目番号1については、回答項目として選択した人数の度数を、 χ^2 検定結果と共に示してある。

(1) 全般的傾向について

調査項目2から31について、両側検定1%水準で有意差のあったのが16項目、5%水準で有意差のあったのが5項目であり、そうでないものが9項目であった。約68%の項目で有

意差のある変化を確認することができた。

項目1からは、統制群の学生が期待度数よりも有意に2番を選択しているにもかかわらず、実験群の初受講生は、受講前には項目1を、受講後には項目3を有意に選択しており、ここからは3部構成のわたしメッセージの習得が伺える。

(2) コミュニケーションの訓練スキル

以下は、教師学が目指すコミュニケーションの訓練スキルについて述べる。

受動的な聞き方に関わる項目6, 18, 19から、待ちの姿勢が理解されている。また反受動的な聞き方の、項目7では有意差はないが、項目16では有意差が見られ、指示についても受容的な方向に有意に作用していることが分かる。

3部構成のわたしメッセージ（行動→影響→感情）にかかわる感情表現や自己表現・自己開示（項目3, 4, 5, 10, 11）は有意に望ましい方向に変化している。

わたしメッセージ（項目8）およびこれに関連する価値観の伝達（項目9）も有意に望ましい方向に作用している。

行動の四角形（項目15）については有意差が無く、行動の四角形の想起にまでは及んでいないことが分かる。初受講生には、教師学が提案するユニークな、是非初受講生には身につけて欲しいと願う内容である、問題所在の整理枠については、十分に理解されていないようである。

勝負なし法（項目27）については、有意に望ましい方向に変化している。

(3) 訓練スキル運用上の基本的考え方（神話的役割観・対等な人間性・言葉の影響力）

次に、上記(2)のコミュニケーションの訓練スキルを運用する上で、重要な基本的考え方にかかわる項目について述べる。

教師の神話的役割観については、有意な変化が見られるのが項目12, 17, 20, 22の4つであり、有意な変化が見られないのが項目13, 14, 21, 23, 24の5つである。

教師と児童・生徒との対等な人間性にかかわる項目2については望ましい方向に変化していることが分かる。

言葉の影響力については、項目28・30で自覚はなされているが、項目29から「一言でも児童・生徒は変わる」ことに対しては期待されていないことを示している。一方、項目31は有意差のある、しかも悪い方向に変化しており、話したことは一言では無理だが、伝わるはずだと考えられていることが分かる。

また、学習指導と人間関係とのかかわりについては、項目25「良好な人間関係を前提として、学習指導が成立する」が有意差有り、項目26「学習指導を通して、良好な人間関係が作られる」は変化無しであった。教師学の集中講義では、学習指導を前提とせず、むしろ人間関係を前提として講義が進められたことを示しているといえる。

以上のことから、本研究の一つ目の目的である、どの程度の変化を検出できるかについては、31項目中21項目、つまり約68%の項目について有意差のある変化を確認することができた。次に、短期的な集中講義においては、神話的役割観に見られる通り、有意差有

り4項目、無し5項目であり、明確には言えなかった。調査項目の更なる工夫が必要である。

また、教師学のコミュニケーションの訓練スキルである個々の項目では有意に効果が見られたが、教師学の提案する最大の特色である、問題を整理する枠組みである「行動の四角形」については、十分な理解が得られなかったようである。(以上、文責：大河原清)

6. 2 講義内容の説明時間とアンケート項目の有意性との関連の分析

(1) アンケート項目の教師学キーワードへの当てはめ

調査に用いたアンケート項目を、教師学キーワードに基づいて分類した(表3を参照)。教師学キーワードAは大分類を、教師学キーワードBは小分類を示している。つまり、教師学キーワードAには、教師学キーワードBを統合した用語を使用している。これらの分類は、「表1：『教師学』受講生に対するアンケート用紙」の結果に記載する各項目のキーワードに準拠している。

各教師学キーワードの説明時間を求めるために、講義を録画したVTRを再生しながら、「表2：時間軸に沿った講義内容」の通り整理した(表2の一部分のみ添付する)。

表2において、左端「時間」には講義の時刻を、「講義の内容」には講義の内容や活動を、「関連するテキスト」には講義の内容およびキーワードと関連すると思われる箇所を、「要点」には講義から分かる教師学の考え方や講師の発言を、そして「アンケート分類と説明時間」には教師学キーワードの説明時間を記した。

(2) 教師学キーワードA(大分類)とアンケート項目の有意性の関連

表3：教師学キーワードA(大分類)とアンケート項目の有意性との関連

教師学 キーワードA (大分類)	説明 時間 (分)	教師学キーワードB (小分類)	アンケート項目番号 (下線部有意差有) (1-1,1-2,1-3は割合から除外)	有意差有りの項 目の割合(%)
1) 話す	418	①わたしメッセージ (195分) ②あなたメッセージ (80分) ③言葉の影響力 (143分)	1-3,3,4,5,8,9,10,11 1-2 28,29,30,31	10/11=91
2) 聞く	314	④受動的な聞き方 (47分) ⑤能動的な聞き方 (220分) ⑥不適切な聞き方 (47分)	6,18,19 1-1 7,16	4/5=80
3) 教師学 マインド	258	⑦教師の神話・権威 (201分) ⑧学習指導と人間関係のかかわり (57分)	2,12,13,14,17,20,21 22,23,24 25,26	6/12=50
4) 問題の 所有	179	⑨行動四角形 (179分)	15	0
5) 問題解 決の方法	139	⑩勝負なし法 (139分)	27	1/1=100

表3は、表2の説明時間を教師学キーワードAの各項目毎に整理したものである。

説明時間の長い方から、1)「話す」が418分、2)「聞く」が314分、3)「教師学マインド」が258分の順で、講師の説明時間が占められていたことが分かる。教師学で中心的な項目である「問題の所有」の179分と「問題解決の方法」の139分は順位がそれぞれ4位と5位に位置していることが分かる。

次に、教師学キーワードA（大分類）とアンケート項目の有意性との関連は、「5）問題解決の方法」を除き、説明時間の長かった項目、つまり「1）話す」、「2）聞く」、「3）教師学マインド」の順で、有意差有りの項目の割合がそれぞれ91%、80%、50%と続き、説明時間の長さとはアンケート項目の有意性の割合とは、ほぼ対応していることが分かる（ただし項目数が少ない点に注意を向けなければならない）。

「4）問題の所有」と「5）問題解決の方法」とはアンケート項目が1つのために、必ずしも対応関係にはなかったのではないと思われる。

(3) 教師学キーワードB（小分類）とアンケート項目の有意性の関連

次に、教師学キーワードB（小分類）とアンケート項目の有意性との関連を調べるため、表4の通り整理した。

表4：教師学キーワードB（小分類）とアンケート項目の有意性の関連

教師学キーワードB（小分類）	有意差の見られた項目（下線部有意差有）	
⑤能動的な聞き方(220分)	1-1	?
⑦教師の神話・権威(201分)	<u>2,12,13,14,17,20,21,22,23,</u> <u>24</u>	5/10=50%
①わたしメッセージ(195分)	1-3, <u>3,4,5,8,9,10,11</u>	7/7=100%
⑨行動の四角形(179分)	15	0=0
③言葉の影響(143分)	<u>28,29,30,31</u>	3/4=75%
⑩勝負なし法(139分)	<u>27</u>	1/1=100%
②あなたメッセージ(80分)	1-2	?
⑧学習指導と人間関係のかかわり(57分)	<u>25,26</u>	1/2=50%
④受動的な聞き方(47分)	<u>6,18,19</u>	3/3=100%
⑥不適切な聞き方(47分)	<u>7,16</u>	1/2=50%

表4において、教師学キーワードBと有意差の見られたアンケート項目との関連については、必ずしも対応関係にあることが言えない。これは、アンケート項目の数が教師学キーワードBに対応して同数配置されていなかったことによるものと思われる。このため、教師学キーワードBの各分類毎に順を追って、それぞれの結果を定性的に述べ考察を加えることとする。

「⑤能動的な聞き方 (220分)」については、アンケート項目が1つのみで、しかもそれは度数を調べる項目(1-1)であったために(度数を調べた項目1-2,1-3は、以下の考察においては考察の対象から除外する)、説明時間と有意性との関連は判断出来ない。

「⑦教師の神話・権威 (201分)」については、10項目中5項目(50%)で有意差が見られた。有意差の見られなかった項目のうち、項目13, 23, 24の3項目は受講前後の値は近接しており、有意差の見られなかったのは教師学の提案する考え方に近かったためであると思われる。残る項目14, 21については、教師学の受講によって受講生の意識が変化するか否かが、調査者側において事前に断定できない項目であった(表1における▲記号は「曖昧」を示す)ためである。したがって、望ましいと考えられる項目の数は、10項目中8項目となり、教師学の受講によって「教師の神話・権威」について意識が変化したものと考えられる。

「①わたしメッセージ (195分)」については、7項目全てにおいて有意差が認められた。このことから、教師学が考える良い人間関係を作るために効果的な話し方を習得していたと考えられる。また、このキーワードと関連する「②あなたメッセージ」では該当するアンケート項目は無いが、「③言葉の影響」では有意差の見られる項目が4項目中3項目(75%)と高い数値が出ている。

ただし、アンケート項目31「話したことは、伝わるはずだ」について、「あてはまる」方向に変化しているが、教師学では話し方によって伝わり方は異なり、間違えた話し方では相手に真意が伝わらないと言っている。そのため、この項目では望ましくない方向に変化していると思われる。

逆に、教師学では、教師学が提案する正しい表現をすれば、話したことが伝わる筈だと考えているので、アンケート項目31「話したことは、伝わるはずだ」について、「あてはまる」方向に変化しているのは、講義の効果があったと考えられることになる。

このように2通りの解釈が可能となり、このアンケート項目には不備があったものと思われる。

「⑨行動の四角形 (179分)」については、数値的には有意差が認められないが、受講前から望ましい結果であったため、受講によって更に大きく変化することが見られなかったといえる。

ただし、時間配分から見ると、講義中に何度も説明されており、もう少し望ましい変化が考えられるので、受講生には十分に理解されなかった難しい概念といえる。

「⑩勝負なし法 (139分)」については、1項目のみであるが、有意差は認められており、問題が生じた時の対処法は習得されたものと思われる。

「⑧学習指導と人間関係のかかわり (57分)」については、アンケート項目25と26では、互いに反対の立場からの聞き方であり、アンケート作成の立場からは望ましい聞き方ではないものの、項目25「良好な人間関係を前提として、学習指導が成立する」において有意差のある、しかも望ましい方向に変化していることから、教師学の立場と同じ立場を支持

しており、講義の成果はあったものと解釈する。

「④受動的な聞き方 (47分)」については、3項目全てについて有意差有りの望ましい方向に変化しており、待ちの姿勢が理解されていることが分かる。

「⑥不適切な聞き方 (47分)」については、2項目中1項目において有意差有りの望ましい方向に変化しており、前項の「④受動的な聞き方(47分)」と共に、教師学の考える良い人間関係を作るために効果的な聞き方を習得したと考えられる。

以上のことから、教師学キーワードB (小分類) については、説明時間と有意差有りのアンケート項目との関連は線型的な比例関係にあるとは言えず、どの項目においても有効に習得されたものと解釈できる。つまり、「④受動的な聞き方 (47分)」や「⑥不適切な聞き方 (47分)」に見られる通り、最低47分を超えて、各項目は説明されており、小・中学校の1校時 (45分, 50分) 前後を超える時間においては、必ずしも学習時間との関わりで習得内容との関連を分析することが生産的ではないのかもしれない。

こうした結果になった一つの理由は、説明時間を詳細にカウントしなかったためと思われる。このことは、教師学キーワード (大分類) の場合には、対応関係にあったことを考慮すると、理解が可能な点である。

また、「①わたしメッセージ」や「⑤能動的聞き方」は、「⑨行動の四角形」や「⑩勝負なし法」を説明する時に必ず付随している説明概念なので、説明時間の数値が多くなるものと思われる。

したがって今後は、各項目についての詳細な時間計測による分析と共に、説明時間を目安としない、別の質的な研究方法を導入すべきかもしれない。(6. 2の文責：牛嶋佳)

6. 3 キャッチフレーズ「四角になったのコミュニケーション」の提案

ここでは、説明時間が179分も行われながら、十分な理解がなされていなかった、しかも教師学が提案する重要な概念である「行動の四角形」について指導上の工夫を提案する。問題の整理枠である「行動の四角形」の理解、および教師学でいう個々のコミュニケーションの訓練スキルの構造的な理解を容易にする方法として、たとえば、「行って、帰って、また行く」という坂元(1971)の3方向コミュニケーションのキャッチフレーズにならい、「聞

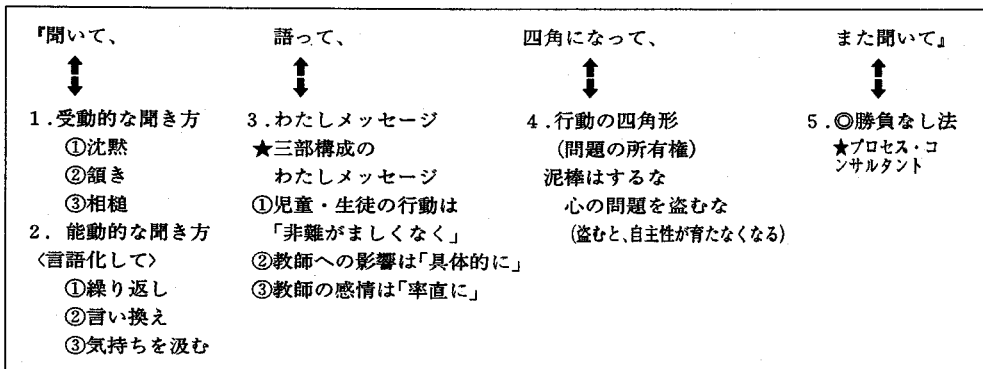


図1：四角になったのコミュニケーション
(教師学のコミュニケーションのための訓練スキルとの対応関係)

いて、語って、四角になって、また聞いて」という「四角になってのコミュニケーション」というキャッチフレーズを、本研究では提案したい。

キャッチフレーズ「四角になってのコミュニケーション」と教師学のコミュニケーションのための訓練スキルとの対応関係は、図1の通りである。

このキャッチフレーズを講義の途中でも話題が変わる度に断えず提示することで、学習の位置づけを自覚させると共に、教師学が提案するキーワードを容易に記憶させることが可能と考える。(文責：大河原清)

7. 参考文献

- 石居進 1983 BASIC による統計処理(PC-8801) 培風館
 近藤千恵 1993 「教師学」心の絆をつくる教育 親業訓練協会
 近藤千恵 1998 理由ある反抗 総合法令
 坂元昂 1971 教育工学の原理と方法 明治図書

8. 謝 辞

本研究は、文部省科学研究費補助金〔基盤研究(C)(2)：研究題目「不登校の一要因となる教師の強制的コミュニケーション・スタイルの分析」；研究代表者 大河原清〕による研究の一環である。／調査にご協力頂きました関係各位に、心から感謝を申し上げます。特に、アンケート項目の作成に当たり、苅間澤勇人教諭(岩手県立盛岡商業高等学校)と佐々木佳史教諭(岩手県立盛岡第二高等学校)に感謝を申し上げます。

¹⁾本研究は、日本教材学会において口頭発表した原稿をもとに、新たに説明時間の分析を追加して作成したものです。このため日本教材学会年報第10巻(1999.3 投稿中)と一部分重複していることをお断り致します。

この調査は、初日(8/4)と最終日(8/7)に行います。同じ人かどうかを知りたいので、口内の数字やマークは控えておいて下さい。最終日にも初日と同じ数字やマークを記入して下さい。よろしくお願いします。

好きな7桁の数字を→ 2文字記入し封	好きな数字を→ 4桁分記入し封	好きなマーク→ 記入し封
-----------------------	--------------------	-----------------

上段：人数% (解答人数)
下段：調整された残差・検定結果
*p<.10 **p<.05 ***p<.01
↓ χ^2 検定 (田中・山際 1989)

表1 『教師学』受講生に対するアンケート用紙

Z師以外の方は、教師の場合を想定して、お答え下さい。

データは全て統計的に処理されます。ご迷惑がかかることは、絶対にありません。

1. (授業中、児童・生徒が騒いでいるとき)

あなたは、どのように対処しますか。選んだ番号を○で囲み、番号を記入して下さい

1 「どうしたの」と聞く

○ 能動的な聞き方

2 「うるさい、静かにしなさい」と発言する

● あなたメッセージ (命令・指示)

3 「みんなが騒いでいると授業がしづらなくて困る」と発言する

○ 3部構成のわたしメッセージ

2. (テスト終了後の場面に)

児童・生徒がプリントを集めるとき、

○ 対等な人間性

3. 児童・生徒に自分の失敗を話せる

○ 自己開示 (失敗)

4. 児童・生徒の前で教師の顔を見せ、恥づかしい

● 素直な感情表現

5. 児童・生徒の前で「私は悲しい」と言える

○ 素直な感情表現

6. 児童・生徒の話を最後まで待つ

○ 受動的な聞き方 (待ちの姿勢)

7. 児童・生徒の相談に聞いて、解決策を指示し(ける)

○ 反受動的な聞き方

8. 授業中「あれ、どう思う?」と、自分の気持ち言える

○ わたしメッセージ

9. 相手と意見が違ふとき、自分の意見を表現できる

○ 価値観の伝達

10. 自分が失敗したとき、3分以内に謝る

○ 自己開示 (失敗)

11. 自分の感情を児童・生徒に表現できる

○ 素直な感情表現

12. 児童・生徒の間違った意見は、教師が直す必要がある

● 神話的役割観

13. 教師は、何でも知っているなければならない

● 神話的役割観

14. 児童・生徒を愛する心は、教師の指導力や信念が必要

▲ 神話的役割観

15. (授業中、児童・生徒が騒いでいるとき)

教師と児童・生徒のどちら側に原因があり、教師は不満を感じる

その問題の所在を考える

○ 行動の四角形の想起

16. 児童・生徒が教師の指示に従わないと、頭に来る

● 反受動的な聞き方

17. いい児童・生徒と、悪い児童・生徒がいる

● 神話的役割観

18. 児童・生徒を、心から信頼することができる

○ 受動的な聞き方

19. 児童・生徒のどのような価値観も受け入れられる

○ 受動的な聞き方

20. (教室で問題が生じたとき) 教師が正しいと 信じて結論に導く必要がある

○ 神話的役割観

21. 授業への教師の熱心な取り組み方が、児童・生徒を愛する

▲ 神話的役割観

22. 規則を守る児童・生徒に対し、注意は必要

○ 神話的役割観

23. 児童・生徒の価値観は、直ぐに変えられる

○ 神話的役割観

24. 教師の権威は、人間的魅力による

● 神話的役割観

25. 良好な人間関係を前提として、学習指導が成立する

○ 学習指導と人間関係の前提

26. 学習指導を通して、良好な人間関係が作れる

○ 学習指導と人間関係の前提

27. クラスで問題が生じたとき、その問題を解決する有効な方法がある

○ 勝負なし法

28. 自分の発言が児童・生徒に、どんな影響を与えるか 自覚がある

○ 言葉の影響

29. 教師のたった一言でも、児童・生徒は変わる

○ 言葉の影響

30. 授業中の発言を、あとで省みる

○ 言葉の影響

31. 話したことは、伝わるはずだ

● 言葉の影響

○ 言葉の影響

使用記号：○適切 ●不適切 ▲曖昧

あなたご自身のことについてお聞きします

↑ 総合判定
Wilcoxonの符号順位検
定法 (石居 1983)

32. 職業 → 1. 現職の教員 2. 学生または院生 3. その他 (元教師・主婦・)

33. 性別 → 1. 男 2. 女

34. 年代 → 1. ~22歳 2. 23~30 3. 31~35 4. 36~40 5. 41~45 6. 46~50 7. 51~55 8. 56~60 9. 61~

35. 教師経験の有無 → 1. 有 2. 無

36. 教師経験 (有) の方のみ → 学校種別 (1. 小学校 2. 中学校 3. 高等学校 4. 幼稚園・保育園

5. 養護学校 6. 専門学校 7. 盲学校 8. その他)

37. 『教師学や観業』受講体験の有無 → 1. 有 2. 無 (今回初めての方)

表2：時間軸に沿った講義内容

時間	講義の内容	関連するテキストの章	要点	アンケート分類と説明時間
8/4 13:10	参考文献の説明			
13:23	・ディスカッション 2人組を作って「自分の好きな食べ物」について話す。1人1分、AさんからBさん、BさんからAさん（Cさんがいるところもある）。自己紹介も。 終わったら片方の人（Bさん）たちをずらして新しい組を作り、同じことを今度は30秒ずつ話す。 終わったらさらにずらして新しい組を作り、「私のやりたいこと」について1分ずつ話す。自己紹介も。 終わったらさらにずらして、同じことを今度は30秒ずつ話す。 終わったらさらにずらして、同じく30秒ずつ話す。	・2章	・体験すること ・自分のことを話すこと ・知らない人と話すこと	①わたし メッセージ 40分
13:49	感想を述べる		他者に対して自分をオープンにする。 他者に関心を持つ。	
13:57	先生のコメント		生徒が近づいてくることが望むだけではなく、教師から生徒に近づいていく。 教育への積極性。 言語は自分に関することでも訓練効果がある。	

1

時間	講義の内容	関連するテキストの章	要点	アンケート分類と説明時間
14:03	・ディスカッション 自分が考える「良い教師」のイメージ。「良い教師」とはどんな教師か、について5人組で20分間話し合う。	・6章 ・おわりに P244～		⑦教師の神話、権威 57分
14:29	レポーターが発表。			
14:50	世間一般の「いい教師」と照らし合わせてみる。 トマス・ゴードン著『教師学TET』より、「いわゆる理想の教師像・教師の神話」について読み上げながら、説明する。		いわゆる「理想の教師」というのを全部兼ね備えるのは難しい。教師役を演じることになる。 理想的な教師になろう（演じよう）と思うと、生徒にも理想的な生徒を演じることを求めてしまう。そのため、人間的なふれあいなくなる。 演じることのない、ありのままの自分を見せることができるのが、生徒と教師の良い関係である。	
15:00	休憩	・1章	同じく『TET』より、生徒との良い関係について、読み上げながら説明する。	
15:15		・3章	行動の四角形について説明する。（枠組みは無い。ただの四角形。）	⑨行動の四角形 33分
			判断する前に行動の四角形を通してみる。 行動の四角形とはみんなの心にある意。すべての行動はこの四角形を通り、それによって判断される。	

2